

図書館だより No. 10

平成 25 年 2 月 22 日発行

2月も終わりに近づき、寒さのやわらぎを感じられるようになってきました。桜の季節はまだ先ですが、梅の花があちこちで咲き始めていますね。埼玉の梅の名所である越生梅林や長瀬宝登山の梅百花園なども開花が始まっています。春の桜もいいですが、春の訪れを待ちながら眺める早咲きの梅も綺麗です。今年は桜の前に梅でお花見を楽しんでください。

さて、3年生は高校生活も残り数日となりました。1日1日を噛みしめながら大切に過ごしていることだと思います。最後の1日までたくさん思い出を作ってください。

卒業旅行などを計画している人たちも多いのでしょうか。「みんなでどこかへ行きたいと思ってはいたけど、計画ができていない」という人も、日帰りのぶらり旅ならば今から計画を立てるのでも遅くありません。1年生の時に遠足で訪れた思い出の鎌倉へ出かけたり、3月16日から西武線や東武線から乗り換えなしで行けるようになる横浜へ出かけたりするのも楽しい旅ができると思います。

梅の花の名所は*

291.3-7 『花の名所と植物園』 ぴあ

梅の花を見に、どこへ行けばいいだろうと困っている人にお勧めしたいのがこの本です。関東圏内の花の名所の案内と共に花の種類が載っているのですが、梅の花には「思いのまま」や「開運」など、一度聞いたら覚えてしまうようなインパクトのある名前を持つものがあり、名所を知る以外にも楽しい豆知識を増やせます。また、季節ごとに見ごろの花と名所が紹介されているので、春の梅や桜だけでなく一年を通して活用できます。読みながら、自分好みの花を探して、2013年は花めぐりを楽しむ1年にしてみてはいかがでしょうか。

思い出の鎌倉へ再び*

291-3 『ココミル 鎌倉』 JTBパブリッシング

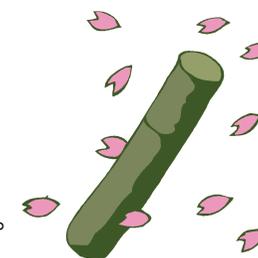
寺社めぐりも街めぐりも楽しめる鎌倉。有名な観光地が多くありますが、この本を読んでいると「鎌倉ってこんな見どころもあるんだ！」という新たな鎌倉の魅力を知ることができます。お馴染みの場所以外にも足を運んで、鎌倉をさらに広く深く楽しんでみてください。

また、散策の合間に寄りたくなるおしゃれなカフェやレストランもたくさん紹介されていて、どこで何を食べようかとみんなで悩みながら「食」を楽しむ旅を計画するのもぴったりの本です。



贈る言葉に代えて

この3年間でたくさんの本と出会った人もいれば、たくさんは読まなかったけれど1冊の大切な本に出会えた人、本に触れる機会があまり持てなかった人、それぞれいることでしょう。本とは、おもしろいもので、その時はピンと来なかった本でも、何年か後に読んでみると、まったく違う感想を抱いたりします。その本がいつ自分の心に響いてくるのかは、読んでみないとわかりません。本がなくても確かに生きていけます。だけど、本は時に自分に必要な何かを語りかけてきてくれるものです。だから、どんな環境の中でも本と触れる機会を失わずに人生を歩んでいってください。卒業おめでとう



生きることだ。懸命にいきること。どんな境遇にあっても、どんな状況にあっても生きるということ。

070-7 『以上、現場からでした。』 安藤優子 || 著 集英社

「事件は会議室で起きてるんじゃない。現場で起きてるんだ!」と言ったのは『踊る大捜査線』の青島刑事でしたが、現場にこそすべてがあるのです。ニュースキャスターとして有名な安藤優子さんが経験し、なによりも大切にしてきたのは、現場へ行き、その空気を知ること。それこそが第一級の情報であり、現場だけが持つ尊い力を伝える唯一の手段になりえると彼女は信じています。

そんな彼女がレポートしてきた震災や戦争、インタビューした著名人について語ったこの本には、現場のもつ圧倒的な力強さがあり、ぐいぐいと引き込まれ、世界情勢や人間に興味がわきます。

不安とか寂しさとかはつるけど全部抱えて歩いてみせる

911.1-カ 『放課後』 加藤 千恵 || 短歌 タクマクニヒロ || 写真 雷鳥社

3年間の高校生活には、色々なことがあったと思います。楽しいこと、苦しいこと、たくさん思いを経験しながら過ごしたことでしょう。そんな色々な心の揺れ動きを思い出せるような短歌集。たった31文字の言葉なのに、その中で全てが語られているように感じます。

学校のどこかで目にしてきたような景色の写真もまた心にしっくりときます。自分の3年間を振り返って、ちょっと感傷的な気持ちに浸れる1冊です。そしてきっと、社会人になってから読んでも懐かしさを感じられると思います。数年後にもう一度、読んでみてください。

ここからどれくらいふんばるかが、人生じゃないかああああ!

914.6-3 『孤独と不安のレッスン』 鴻上 尚史 || 著 大和書房

孤独や不安を感じながら、そして、それらと折り合いをつけながら私たちは生きています。誰にも話せず悩むこともあるでしょう。だけど、大切なのは「思いつめない」ことです。そのために必要なのが「本当の孤独」と「前向きな不安」を知ることだと著者の鴻上さんは言っています。孤独という言葉や環境に対してはよくない印象を持ってしまいがちですが、孤独をきちんと知ることで、ひとりの時間を大切にできるようになります。また、不安に対しても、どんな思考で向き合っていけばいいのか、ヒントを掴めます。「こんな考え方もできるんだ」と心を晴れやかにして、よりよく生きていってください。

🔪 1冊の本から繋げよう 🔪

今月の1冊は…

1月に発表された第148回直木賞を受賞した朝井リョウさん。学生時代にデビューし、初の平成生まれでの直木賞受賞と今、注目を浴びている若手作家です。デビュー作『桐島、部活やめるってよ』は昨年、映画化もされました。若者の揺れ動く心の描写が巧みで、若者が読めば、まさに今の自分と重なり、大人が読めば、昔の自分を思い出す、そんな作品が多くあります。今回は直木賞受賞の『何者』から繋げて、本を紹介していきます。

913.6-ニ『何者』 朝井 リョウ || 著 新潮社

拓人は就活中の大学生。ルームシェアをして暮らす光太郎。その元恋人の那月。那月の友だちで拓人たちの家の真上で暮らす理香とその恋人 隆良。そして、かつて拓人と共に演劇を作っていたギンジ。学生から社会人へ、その狭間で生き方を探す若者たちの物語。

自分は何になりたいのか、未来をどう生きたいのか、本当は不安で焦っていて、でも、そんな自分を認めたくないから、気がつくと、自分以外を否定して、ダメなところを探している。そんなことをしながら就職活動をするけれど、頑張っている仲間を見ると、どうしてもその中に飛び込んでいけない。好きな人は自分の友だちを今でも想っている。その友だちは遅れて始めた就活を順調に進めている。かつて、同じものを目指していた友だちは必死に自分の夢を追いかけている。仲間を見れば見るほど、拓人の悶々とした気持ちは膨らんでいく。

そんな拓人に、かっこわるくてもあがく、それが自分に欠けているものだと思える勇気を持たせてくれたのは、意外な人物だった。

『何者』 キーワード1

“就職” ～社会人として働く～

913.6-カ『ハタラクオトメ』 桂 望実 || 著 幻冬舎

ごっつあんは食べるのが大好きなOL。初日に自らを「ごっつあん」と呼んでくださいと告げるさっぱりした性格で職場のみんなに愛されながら、時計メーカーで働いている。そんなごっつあんが女子だけのプロジェクトチームのリーダーを任されることに。どうせ、会社は本気じゃないだろうと軽く考えていたのが、大間違い！腕時計のデザイン案を求められ、ドタバタで出した案は、当然、商品化には至らなかった。残念な気持ちを残しながらも、これでお役目御免と思っていたら、それも大間違い。なんと、第二弾の企画を任せられてしまったのだ。前回の悔しさがあり、次こそという気持ちが芽生えたごっつあんに対し、他のメンバーからはやる気が感じられない。そんな雰囲気の中、ごっつあんのチームは新デザインでリベンジを果たせるのだろうか。

『何者』 キーワード2

“若者の葛藤” ～揺れ動く心の行方～

913.6-モ『つきのふね』 森 絵都 || 著 新潮社

中学2年生のさくらは最近、友人の莉利と気まずい雰囲気。クラスメイトとの距離も感じる。それはある事件があったから。そして、さくらと莉利はその事件をお互いの中で解決できないままにいる。そんな状況の中、さくらはその事件をきっかけに知り合った青年 智や、莉利をいつも追いかけてまわっていた勝田との交流を深める。自分から見たら大人の智も、いつもわが道を生きているように見える勝田も、心の中にはこわいものがある、その不安を抱えながら生きていた。そして、遠い存在になった莉利もまた自分の将来に不安でいっぱいになりながら生きていた。それに気がついたさくらは逃げていた自分を認め、おせっかいな勝田の手助けのもと、莉利とのわだかまりを解いていく。

心は脆い。そして、世界はいろんな問題であふれている。脆い心が壊れないようにみんな自分を守りながら、この世界を生きている。自分の心、人の心、その両方について考えさせられる本。

そして、

朝井リョウさんの作品を「もっと読んでみたい！！」と思った人には

913.6-ニ『星やどりの声』 朝井 リョウ || 著 角川書店

光彦、真歩、小春、遼馬、るり、琴美は早坂家3男3女の6人兄弟。母は父が「星やどり」と名付けた喫茶店をひとりで切り盛りし、この賑やかな兄弟を育てている。父の設計した星形の天井、父の好きだったビーフシチュー、白い色、父の笑顔、言葉、父がいなくなっても早坂家のあちこちには父の気配が漂っていた。それを感じながら暮らす兄弟はそれぞれが誰にも言えない喪失感を抱えたままだった。

その喪失感を癒していく兄弟ひとりひとりの物語が描かれています。兄から弟、弟から姉、と続いていく物語はどれを読んでも、人の持つ温かさに触れられて、胸いっぱい優しさが広がっていくのを感じます。また、母に対して生まれた複雑な思いがほどけていく様子や父が残してくれた奇跡が、兄弟、そして、家族の絆を強くしてくれる様子もまた素敵です。